主従関係に近似したものとも考えられる。

それは何故か。茶は大名家における儀礼や行事を行う上で必要不可欠なものでありながら、入手が困難であり、御用茶師上林春松に頼らざるを得なかったという事情がある。「茶之口切」の茶詰めを上林春松が担当してきたこと、すなわち大名家の年中行事に関与することの意味は大きい。勿論、上林家側の努力や工夫（藩主の宇治巡見時の饗応や伏見での伺候）も看過できない。それらが融合し上林春松家は、御用茶師としてのその地位を不動なものとしていったのであろう。

もう一つ注目すべきは、宇治のロケーションである。歴史的な名所、遊楽の地である宇治は、茶の文化と相まって、大名たちを魅了し続けたのではないか。名所と茶がセットになる宇治は蜂須賀家の人びとを魅了し続けたのである。

その意味からすれば、蜂須賀家と上林春松家の一見特異な関係は、大名と御用茶師の関係に一般化できるのではないだろうか。

史料翻刻

○四一　阿州茶料諸事控

寛政四子年九月

阿州茶料諸事　控

御花畠御用　三月十七日到来四月朔日出ス

一極上　半四　代拾八匁七分弐厘

　初むかし　二

　後むかし　二

一別儀　壱斤　代五拾弐匁

一朝日御煎茶　拾弐斤　代七拾弐匁

御同家様秋切　九月廿四日到来同廿六日出

一極上　半四　代拾八匁七分弐厘

　但初むかし弐　後むかし弐

別儀

一御詰　壱斤　代五拾弐匁

一朝日御煎茶拾弐斤　代七拾弐匁

　合弐百八拾五匁四分四厘

富田御屋敷
一鈴江貞羽様　三拾目入弐袋
書状　のし
一露木有斎様　同断
一加集頓賀様　同断
御勝手金方
一根来忠作様　廿匁入二袋
のし
一竹内万平様　廿匁入二袋
のし
一大山惣七様　同断
奥坊主
一兼子甫碩様　同断
一梶養悦様　同断
一小津友徳様　同断
本〆
一五島重次郎殿　同断
孫作殿
一伴野熊五郎殿　同断
同奥坊主
一久次米秀益老　朝日廿目入二袋
一久米清古老　同断
一渡辺礼徳老　同断
一前田文達殿　同断
一山本泰佐殿　同断

廿小沢友徳殿
若狭様御屋敷
一前田春悦老　朝日廿匁入二袋
のし
塀裏御屋敷
一加集長悦老　同断　橋口文斎殿
御本城茶頭役
一今田周甫老　同断
右御屋鋪当年秋切茶今々申不参候間、何分此節御用被仰付被下候様
呉々願可申候事
一近年ハ萩御煎茶御用相止候ニ付、何分以前之通秋切御茶とも被仰
付被下候様、是又乍御苦労偏御願可被下候事
御本城進物之覚
一二宮羽元様　朝日三拾目入二袋
書状のし
一二宮古閑様　同断
一岡田久賀様　同断
江一岡本為徳様　同断
同奥坊主
一芝原幸碩老　朝日廿匁入弐袋
のし
一美馬恵斎老　同断
一宇野宗古老　同断
外ニ

一橋口周道老　朝日二拾目入二袋
一前田文益老　同断
一梶田随策老　同断
一内藤茂伴老　同断
江一露木勇節老　同断
江一福井官益老　同断
御花畠御屋敷
一岡田仲治殿　同断
一横山順治郎殿　同断
同払方
一橋本石之助殿　同断
一尾崎儀平殿　同断
一三木柳助殿　同断
茶頭
一谷田孝巴老　同断　御長家之内　三人共
一樋富長賀老　同断
一高橋立益老　同断
御本城本〆
一午田又右衛門　朝日　弐拾目入二袋　のし
一寺沢重馬　同断
一中尾佐五右衛門　同断
江一民津作右衛門　同断

一板本氏江　朝日三拾入三袋　書状壱通　のし

見舞申入候而対面被致候ハヽ、先達より毎々願御書中夫々御返答申上候通、此節必至等難渋仕候得者、何分貴公様金子之義も急々分立仕候義も難相成、親類共一同打寄色々相談仕、大方外々借金等ハ一円ニ年賦ニ相成り、只今ニ而ハ最早貴公様斗之義ニ御座候得者、厚御了簡之上暫御待被下候様、猶又御拝借之義も此節追々相願罷在候得者、是ニ而も相叶候上ハ急々一同金ハ御返斉可仕心得ニ御座候間、何分爰暫之内元銀足物共御待被下候様、呉々も相願被申候事

富田御屋敷

右御屋敷御茶頭三人江先達而御拝借上納書付相認メ差上申候処、今ニ御沙汰無御座候ニ付、書付相違等無御座候哉、此義内々ニ而尋可被下候、若又相違有様之沙汰ニ候ハヽ、春松病中ニ而御座候間、何か行届キ不申相違等之義何分御用捨被成下候様□々相願、口上ニ而申述白候事、尤右之趣書状ニ而も申遣シ候得共、猶又口上ニ而申白候事、もし又相済候様

之御沙汰ニ候得ハ、早速其趣書中ニ而申登り白候事

一鈴江氏春松病気之儀度々御書中被下候節ハ、病気毎々御慈情ニ被仰下千万々忝奉存候、此段も春松宜申上候様私江くれく申被付候様等近頃乍御苦労頼入存候、猶又御茶御用之儀も万端御取成被下候様宜申述候事

一三拾目　代弐斤　代六拾目

右御茶岡田久賀老より申来、尤御茶料之義ハ御国元ニ而相渡候趣、其節一所ニ申来序之節受取申事候事

寺島御屋敷

一岩田七左衛門様　通箱壱ツ参居候間序ニ差登申候事

一喜撰　壱斤　代拾三匁

一山吹　壱斤　代九匁

右御茶七左衛門様内河東勇左衛門殿堤寛左衛門殿より六月中頃申来、御茶料受取申事候事、もし又右弐人之内対面被致候ハヽ、春松別而大慶随分厚礼、追々御茶御入用之節ハ、春松江被仰付被下候様呉々被願候事、此段乍御苦労宜御出精奉願候

寺島御屋敷

一岩田七左衛門様　煎茶三袋
書状のし

一河東勇左衛門殿　書状斗

一堤寛左衛門殿　同断

御本城

一二宮羽元老

私病気今ニ全快不仕、何か万端行届キ不申候段、何分御用捨被下候様、呉々口上ニ而申入候事、平生書中に而も嘸々失礼之義とも申上候段御免可被下候様左相頼候

一御茶御用之義万端御取成被下候様、是又可然様被相頼候事

一右羽元老先達而より御病気之由岡田久賀老より申参候、此段も宜御見舞申述候様奉頼候

猶又相渡不致候ヘハ、半銀なりとも宜口上申立受取可被下候事

辰年滞

一山川弥右衛門殿　書状壱通
喜撰　壱斤　代拾弐匁

右之滞之分、何卒少銀之儀ニ御座候得共、近年春松勝手向甚難渋ニ罷在候ヘハ、近頃いさゝか之儀ニ候得共、何卒二三ヶ年以前より春松病気ニ而何か物入多万端差つかいニ候間、当年御為済被下候様くれ〳〵頼可入候事

一中村主馬助様　書状壱通斗

一原軍左衛門様　書状壱通煎茶二袋二袋

調物覚

足袋　紋羽白

一玉子紋羽十文　弐足　一九文半　弐足

一九文弐歩　四足　一十文　五足

一木綿　壱反　一紅鳥　壱升

一玉子三十　袋十三足

〇九八　阿州公様御入記録

文化十二乙亥三月吉日

阿州公様御入記録

上林秀政

一太守様当年御初入御参府として、御国三月九日御乗舟之趣ニて、十日御乗舟被成、十二日大坂御着、大坂中一日御逗留ニて大坂御順見被成、小野池宅江御入被成、十三日大坂御乗舟、同十三日夜橋本八幡ノ間に御船留り、十四日朝五ツ伏見御着被成候、為御出むかいト御船場迄出ル、御本陣へ御入直様恐悦ニ出ル也、尤直様御目見被為　仰付候、首尾能相済申候、御初入之御時御例ニ御懇御意被成下候、御目見相済候て暫有りて京御留主居勘定方御役人江御礼申上ル、夫より御年寄御元〆御目附御詰席江出恐悦御礼申上ル

御家中方廻勤

御初入之献上物奥ニ記ス

十四日御目見相済候て、今日か明後十六日之内宇治見物鮎汲見物として　旦那内々被参候間其手配り仕候旨、留主居被申渡候、直様御請申上ル、然ル所十四日雨天ニ付御延引ニ相成ル、又々被仰渡明十五日九ツ頃より雨あかり候ハヽ宇治へ御出候間、其心得仕候様被仰渡候、天気成者京都御見物被成候間、貴様も御供被致候旨、尤先達而も御供有之候よしニ候ハヽ猶々御供仕、京都御見物の御様子とも相心得置可申かた宜様ニ被存候間被仰渡候、難有御請申上、三月十五日天気正六ツ時御本陣御出行被遊、御道筋御見物所々左之通り

一三月十五日京都御順見、御本陣より竹田海道九条御小休、七条通り間ノ町枳穀（キコク）馬場下寺丁五条通り御影堂御覧、五条橋上より籬島（マカキ）御覧、寺町通り蛸薬師開帳御覧、和泉式部軒場梅、誓願寺の中御通ぬけ三条通寺丁本能寺信長塔、二条通東川端丸太丁御小休、下加茂御小休御弁当、百万遍吉田真如堂黒谷銀角寺御小休、鹿ヶ谷法然院前安楽寺前霊鑑寺前光雲寺前若王子前永観堂、南禅寺裏門より慈氏院御小休、南禅寺方丈名画御覧、植髪御影前より三条通、白川橋知恩院祇園下河原紅雀茶屋、丸山連阿弥ニ而御昼、東大谷前双林（ソリン）寺前安井高台寺前八坂三年坂清水六道前六波羅蜜（ミッチ）寺前愛宕念仏寺建仁寺町大仏前泉入寺瓦丁東福寺伏見海道稲荷前御小休、藤の森前御順道御帰

十五日丸山蓮阿弥ニて御次廻り之御昼被下候献立

献立

一向　さわら　白ミそ
　　せんば　一汁　青ミ
　　鯛

　　めし　香の物葉付大こん

一煮物　椎茸
　　竹ノ子　一小茶碗物付
　　ます

一御酒

一御取肴　五種
一巻すし
御余慶之茶碗蒸御次より被下候
太守様御道筋ニおり〳〵御咄被遊候、大方御請申上御噂被遊候処、
大方御答申上ル
一十六日御供之御方々御名前荒まし記ス
御年寄
一長坂三郎左衛門殿　一坪内三記之助
御目付　一三宅源之助
一森平馬殿　一根本源左衛門
頭取　御膳ばん
一長濱栄次殿　一林善太夫
同　御いし
一三間雅兵衛殿　一渡辺一解
同　一上林春松
一佐々木桂右衛門殿　一木津や案内
御側　御茶道
一大口秀之丞殿　一露木蘭斎
同
一長谷川鶴之助
荒増右ニ記ス
一御小休所々ニ而御茶弁当取扱蘭斎手前仕り候、其外御次向御膳出
御茶上ル
一十五日御本陣へ御帰、暮過直様御礼申上ル、御年寄詰所京御留主
居とも
一十五日夜弥明日宇治江御出ニて候間、其心得可御留主居被仰渡候、
御請申上直様帰宅ス、十五日夜夜通し、十六日明六ツ時木津や御
立御道筋左之通り、木津やより弾正町通豊後ばし椎月通六地蔵江
出木ハた黄檗御覧、通圓御小休、橋寺恵心院興性寺、春松方江御
入御昼上ル、御膳献上御ゆるりと被遊、御飯後平等院宝物とも御
覧、橋詰より御舟ニ而御下り、木津や前着ス、鮎汲之提重ヲ御下
り舟江献上仕候
鮎汲之処道少々張り候故俄ニ延引相成ル、又々重而御出之節と申
候御意御座候、手前六地蔵宇治道角清入口迄御出迎申上ル
夫より御供御案内申上ル
一御膳廻り数々御替被遊候
一御鱠　三度御替り　一御汁　三度
一御煮物　二度　一御飯　同断
一鮎のすし　二ツもり三度御替り
此すし中ニても御意ニ入申候、春松江能カケントイエト御意被下
候、仁尾兵太三宅源之助御せんばん矢上仁左衛門被申聞候
一御好物之品　すし類
一作り身物
一塩焼鯛　何ニても塩焼肴御好、其内たいノ方よろしく
一只酢のもの宜　但シキス又ハしやかすニてもいり酒并いり酒す三
ばいす不宜候
一御好なき品
一いり酒す　一三ばいす　一いり酒
一うなぎ　一うこぎ　一うに
一えび

御献立

一御鱠　但きす　うと　青な　鮒

一御汁　白みそ　しゆんさい　あづき

一御飯

一御香の物　なら漬瓜　は付大根　干さん枡

一御煮物　花ゆ　粒しいたけ　わりふき　たい

一御台引　水引こんふ　松風　鱧

一御盃

一御酒　朝日

一御吸物　木のめ　鯛

一御取肴　青のり玉子　伊勢海老　さわら　梅肉あへ　木くらけ　けしかけ　二段ゆりね　きんし河茸

一御鉢肴　生かい　はり生か

一御皿肴　小あゆ　すし　ほだて

此小あゆすし御意ニ入申候、三度御替りニ成ル

一御蒸菓子　大徳寺　きんとう　やうかん

一御干菓子　三種

一御濃茶　大祝むかし　一ふく

一御薄茶　極むかし　二ふく

一御煎茶　折たか　きせん　数度　同

此折鷹別而御意ニ入申候

以上

御膳御廻り　御意相叶候

御茶之処も能あかり申候、別而折たか殊之外御歓　御意被下置候

一鮎汲場所

御献立提重

一御巻酢　山吹まき　のりまき　紅生か　しいたけ　つぶ三枡　めしそ　たい

山吹まき　一品　のり巻　一品

二品ニして、山吹とハ玉子まきの事、玉子ニて巻申候

中ノ品ハ大方同断

右一重

こくし　花□こ　松前まき

一かまほこ

車えび

山枡醤油

右一重

丸むきうと　□付

一角くわい　くり

紅葉麩　ゆば

けんちん

右一重

一とうしんいも

右一重

以上

一野風呂　一式

但シ御上　折鷹　きせん
御せん茶斗、御うす茶余意不仕
御茶台　茶巾　茶越　茶碗　砂きん　水　しやく　すみ　呉座せん　御たはこほん
右御上向
一御次之向は三厘まんちう百斗余意
御せん茶之分者大やくわん二ツ余意
呉座二枚　茶碗十　たはこ盆一ツ
夫々玉子籠ニて荷
一鮎汲ノ処者小ノ尾（高尾）村江味トより頼被呉候
小野尾橋ノ側桜の木と申処能汲申候旨ニて取斗、道すし二十丁斗有之候
俄ニ御延引ニ相成申候、重而との御意ニ御座候
右ニ付御提重伏見江之御下り舟江廻ス
御次　献立
鱠　岩たけ　うと　赤かい　汁　からし　ふき
平　ミつは　しいたけ　たい
飯　香の物　大こん
焼物　さわら　きりミ
御盃
御酒　諸白
御取肴　うなき　小くし　ゆひし　かまほこ　えひ　紅生か　かう茸
吸物　木ノめ　うしほ煮　たい
小皿　からし味そ　ほら　鮎ノ内
干菓子
御薄茶　別義
御せんし茶　朝日
下部
焼物　せんば　塩　さわら　汁　ふき
平　めの子　竹の子　かまほこ　めし　香の物大こん
せん茶　次朝日粉ませて
大土ひん　七ツ斗余意
座敷錺附
一上床懸物　光林画　二見　一のし三宝
一しやく香籠　一花かきつはた
次御刀かけ　一せんふとん
一二軒床置物　唐画
刀懸

（前三行上に付箋）

「一御刀懸　一せんふとん

一ひやう風ニてかこう　床わきからふすまへ廻ス

次　」

一二軒床懸物　唐画　刀かけ

次ノ間角ニ御上ノ台子ふ呂釜袋棚

御濃茶　御薄茶　折たか　きせん　御濃茶碗

御薄茶碗　御煎茶わん　茶台二ツ　茶せん二ツ

茶巾二ツ　ふくさ二ツ

一御相伴御薄茶碗二ツ　せんし茶わん二ツ

水屋　水次　砂巾　炭取　余意之事

前以所々心懸置、見詰諸道具見斗置申候事大一なり

一六帖床懸物　無学筆

花見斗

一九帖床懸物　大黒

花山吹花生籠　刀かけ

一玄関

一門外銚小桶銚砂

一勝手長四帖

御上之御膳組

御次向之台子一式

勝手居間ノ次江御次ノ膳組

勝手へんしやうさうしの事

此外両長屋向下部置処余意仕候事

御意之趣

御膳　御鱠之御意

小鮎すしの　御意

御船場ニて　御意

春松段々世話ダタト申被下置候

御召舟江乗御供申上ル、伏見着船早々御留主居御勘定御年寄元〆目付御詰席へ御礼申上ル、夫より茶道詰席出御礼申上ル

夫々様よりも御丁嚀ニ御挨拶御立被下候、夫より御家中方御旅宿へ御礼廻勤仕候

御本陣江参り候処御留主居より被仰渡候

左之通

段々御世話相かけ、先以御前様ニも御機嫌能御座候て、於此方共も難有奉存候、貴様ニハ嘸々御心配之候義と被存候、随而乍少分目録之通り被為送候、今日ハ　御上ニも宇治ヲ能被思召候ニ付、何連ニも度々御出も御座候間、其段心得居申候様、此度之処ハ初而御入之御座候事故、貴様ニも御馳走被成候、中々以右被送物ニてハ行届キ不申候得共、猶随分相勤置可申旨被申聞候、且次之名々よりも能申候様沙汰有之候

且藤蔵義大キニほねおり世話ニて候、宜相心得くれられ候様御挨拶被下候、鮎汲之処もとうて近年之内ニ者御座候間、万々乍此上相勤候様被存候

拝領物

一銀　拾五枚

一鰹節　一連拾

右之通御目録御留主居被仰渡候

一金　弐両

右弐両ハ、宇治寺々并此度御次舟二そう此方より出候ニ付、為御挨拶被下候
寺々江之御挨拶之処者、御屋敷より為御挨拶参り申候趣ニて、私より取斗可申旨、別段太内利左衛門被申渡候
右弐両者、舟二そう并寺々江之為御挨拶被下候
一黄檗山
一通圓　金百疋
一橋寺
一恵心院　金百疋
一興性寺
一平等院　金百疋

三月十九日御礼為恐悦京都御屋敷参上仕候、御留主居御逢御挨拶被下候
御役所ニても三人ともハ挨拶被下候、此度之拝領御銀頂戴仕難有御請申上ル
宇治御供ニて御出之方々あらまし留置申候
御年寄　御目付
一西尾数篤殿　一中尾宗兵衛殿
御元〆　是助幾代太殿
一林弥五右衛門殿　伴剛太郎殿
三宅源之助殿
奥領取　根本源左衛門殿
一仁尾兵太殿　庄野賀次郎殿
同　津田彦之丞殿
一佐々木桂右衛門殿　安田増太郎殿
同　長谷川鶴之助殿
一三間雅兵衛殿
御イシ
一伊月了附十老
御膳番
一矢上仁右衛門殿
御茶道
一鈴江宗羽老
右御方々覚候名前記ス

一三月十四日卯ノ刻御着舟、直様御目見被為仰付候、一統御目見相済候上　御初入之御料理被下置候、大津屋表勝手座敷ニおいて被下候
館主名々床向かわしきへだて候
館主手代名々
かたかわ呉服所、此方向イ合ス
向かわ始席佐々木甚三郎より段々
こちら始席呉服所曽谷又四郎
次手前、次喜多権兵衛
献立
一御鱠　木くらけ　大こん　鯛　一御汁　青味　ツマミ鱧
一御煮物　大こん　しい竹　たい　一御坪　いか　青あへ